建設ぶらり旅

満濃池（まんのういけ）
池内村

その2

東日本建設業保証株式会社
建設産業図書館
江口知秀
Tomohide Eguchi

満濃池の堰堤下は、樋門から流れ出る水を活かした「ほたる見公園」という親水公園になっている。その駐車場に自転車をとめて、堰堤の上へ登ってみることにした。公園から眺める堰堤は、けっこうな大きさで、さすが満水時の周囲約二〇キロメートルの溜池を堰き止めているだけのことはある。公園を抜けて堰堤にたどり着き、法面に設けられた階段を登って天端にでると、念願の満濃池を眺めることができた。

堰堤の大きさから想像したほどではないが、それでもやはり湖と呼んで差し支えない。湖面に向かって右手には、空海が修築工事の成功を祈願した場所として伝えられる護摩焚岩がある。水量が少ないときには、堰堤と地続きになっているらしいが、いまは孤島と化している。先月号に紹介したとおり、満濃池は空海が手がけたとする弘仁十二（八二一）年の修築工事によって、現在の三分の一程度の貯水量の池ができたと考えられているが、そのまま順調に今日に引き継がれたわけではない。

まず、修築工事のわずか三〇年後、仁寿元（八五一）年に決壊。その後、天暦元（九四七）年、治安二（一〇二二）年、長暦年間（一〇三七～四〇）と決壊が続き、元暦元（一一八四）年の大洪水によって堤防が決壊してからは修築されることなく、これ以後なんと約四五〇年ものあいだ廃池となり、池の跡地には村までできた。その村は、池内村と呼ばれたという。

嘉元三（一三〇五）年に亀山上皇が皇女の昭慶門院に譲った荘園の目録「昭慶門院御領目録」の讃岐の条に、「万之池」と記されており、これは満濃池が再開発されて荘園地名となったもので、池内村の別名だったと考えられている。

このような池内村だったが、ついに終焉を迎えることとなった。廃池から約四五〇年を経た寛永元（一六二四）年、続いて同三年に讃岐国一円が大干ばつに襲われると、幼い高松藩主の代わりに藩政に当たっていた西嶋八兵衛によって、満濃池が再築されることとなり、寛永八（一六三一）年に完成した。西嶋八兵衛については詳しく触れないが、卓越した土木技術者であり、寛永十七年までに讃岐各地に九〇カ所以上の溜池を築造したという。

さて、満濃池の再築後、池の底に沈んだ池内村の住民の行方だが、「満濃池水掛申候村高之覚」という史料の仲郡の項に、「五拾石　樋外村」という常時配水を受ける特権を認められた特殊な地域があり、これは現在の満濃池の堰堤北側付近にあたる地域で、池内村に住んでいた人々が立退きの代償として与えられたという説がある。

ただし、その他にも池内村を手放した領主への特権であるとか、この地域の人々が廃池時代の旧池地内に湧き出ていた天真名井の水を桶樋で引水して使用していたので、その代替であるという説もある。私としては池内村の人々が、故郷を失いこそすれ、その近くで特権を与えられて生活したと考えたいのだが、詳しいことはわかっていない。

満濃池

［交通］JR琴平駅、琴電琴平駅近辺から自転車で約40分。